

ベルタとは何者か ～ロッシーニ『セビーリャの理髪師』の「キーパーソン」

Who is Berta? key-person of 《Il Barbiere di Siviglia》

樋 口 裕 一 *
Yuichi HIGUCHI

Keywords : Rossini, Beaumarchais, Il Barbiere di Seviglia, Berta, key

1

ジョアッキーノ・ロッシーニ（1792～1868）のオペラ『セビーリャの理髪師』Il Barbiere di Seviglia は、1816年の初演以来、世界の歌劇場で人気演目としてたびたび上演されてきた。よく知られている通り、長い間ロッシーニは二流の作曲家とみなされ、彼のオペラの大半は1970年代まで上演されることが少なかったが、その時期にもほとんど唯一、イタリアオペラを代表する名作として高い評価を得ていたのがオペラ・ブッファ（喜劇オペラ）『セビーリャの理髪師』だった。初演200周年を迎えた2016年には、世界中でこのオペラが上演され、そのユーモアにあふれ、躍動的で生気に満ちた舞台によって観客を沸かせている。

ところで、このオペラに初めて触れた人の多くが疑問に思うであろう謎がある。ベルタとは何者かという謎である。

ベルタはバルトロ家に仕える老家政婦だが、ストーリー上はまったく存在する必要がない。アルマヴィーヴァ伯爵とロジーナの恋にもフィガロの策略にもベルタはまったくかわらない。それなのに、いつの間にか舞台に登場し、公証人など、ほかにストーリーの上では大事な役割の人物には声が与えられていないにもかかわらず、セリフを語り、しかも、それどころか、第2幕にはチャーミングで親しみやすいアリアまで歌いだす。だが、そこでもベルタはいわずもがなのことを歌にするだけであって、その歌にストーリーの上において大きな意味があるわけでもない。

そもそもこのオペラの原作であるカロン・ド・ボーマルシェ Caron de Beaumarchais の戯曲にはベルタ、あるいはそれに似た名前の家政婦は登場しない。そこに召使として登場するのは、くしゃみばかりしているラ・ジュネス（LA JEUNESSE 青春）という名前の老いた男と居眠りばかりしているレヴェイエ（L'ÉVEILLÉ 目覚めたもの）という名前の若い男の2人である。ともに名前と正反対の属性を持つ人物として描かれている。ロッシーニのオペラにおい

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

でも、ベルタはさかんにくしゃみをするので、ラ・ジュネスの属性を受け継いでいるとはいえそうだが、それを除けば、ベルタは特に原作に基づいた行動を取るわけではない。アンブロージョという名前の男性の召使は登場するが、この男はレヴェイエ同様にあくびをしながら数回バルトロの指示に答えるだけで、ベルタの存在感にはるかに及ばない。

ベルタという存在は音楽的にソプラノが必要だという理由から生まれたのだろう。同じ原作に基づくパイジェッロ作曲の『セビーリャの理髪師』を聴くと、女声の少なさに物足りなさを覚える。確かに、重唱などに女性の高音が加わるかどうかは大きな違いがある。その意味では、ベルタの存在はロッシーニの『セビーリャの理髪師』の音楽面での大きな成果だろう。

だが、そうであるにしても、ベルタの存在は謎めいている。いったい、このベルタとは何者なのか。なぜ、ベルタなる人物が登場する必要があるのか。なぜアリアを歌う必要があるのか。

なお、誤解のないように前もってお断りしておく。私がここに書こうとしているのは、ロッシーニと台本作家のステルビーニがどのような意図をもってベルタを創造したかということではない。私が書こうとしているのは、ロッシーニらが意図していなかったこと、少なくとも意識化していなかったことである。意識していないにもかかわらず、このオペラの中に存在し、観客もそれと意識することなくうすうす受け取っているにちがいないこと、それを私は描き出したいと考えている。したがって、アカデミックな手法によって当時の資料を分析するような研究を提示しない。あくまでもオペラの構造から見つけ出せることを描き出すつもりである。

2

ベルタとは何者かを考えるにあたって、まず『セビーリャの理髪師』とはどのようなオペラであるのかを確認しておこう。

初演は1816年、ローマ。フランスの劇作家ボーマルシェが40年近く前の1775年に初演した同名の戯曲(1)に基づいて、チェーザレ・ステルビーニ Cesare Sterbini が台本を担当した。ロッシーニは20歳から37歳までの活動期間に39作のオペラを発表したが、本作は23歳で初演された17作目のオペラにあたる。全2幕で構成され、全曲の上演に2時間半ほどかかる。作曲に要したのは2週間といわれているが、もともと速筆であるうえに、3分の1ほどを自作から転用しているので、奇跡的に早く仕上がったわけではない。

なお、原作者ボーマルシェは、『セビーリャの理髪師』の後、1784年にその続編として『フィガロの結婚』、1792年に『罪ある母』を発表して、全3部作とした。とりわけ、『フィガロの結婚』は大ブームになり、召使のフィガロが機転によって貴族の鼻を明かすというストーリーはフランス革命の精神を準備することになる。また、初演の2年後の1886年にはモーツァルトによってイタリア語のオペラに作曲され、現在までその代表作の1つとして知られている。『セビーリャの理髪師』で恋を成就したアルマヴィヴァ伯爵とロジーンが、『フィガロの結婚』では倦怠期を迎えた伯爵と伯爵夫人として登場する。なお、付け加えると、夫の浮気心に苦しんだはずの伯爵夫人ロジーンは、『罪ある母』では、『フィガロの結婚』で女好きの小姓として登場したシェリュバン（モーツァルトのオペラではイタリア語でケルビーノと呼ばれる）の子どもを身ごもった母親として思い悩むことになる。

いずれにせよ、ボーマルシェの戯曲『セビーリャの理髪師』は、ロッシーニの時代にはすでに多くの作曲家によってオペラ化された(2)大人気戯曲だった。とりわけ1782年初演のジョ

ヴァンニ・パイジェッロ Giovanni Paisiello の作品は名作として知られていた。また、『セビーリャの理髪師』の続編である『フィガロの結婚』の内容はすでに多くの人に知られていた。ロッシーニに作曲を依頼した劇場支配人が安定した人気を見込んであえてポピュラーな題材を選んだといわれている。

このオペラのストーリーを一言で言えば「無益な用心」といってよいだろう。ボーマルシェの原作においてもパイジェッロのオペラにおいても、タイトルは『セビーリャの理髪師 または 無益な用心』Il Barbiere di Seviglia o sia l' inutile precauzione だった。ロッシーニのオペラは初演時、パイジェッロに遠慮して『アルマヴィーヴァ または無益な用心』Almaviva o sia l' inutile precauzione というタイトルをつけられた（それなのに、初演時、パイジェッロを支持するグループから激しい妨害を受けることになる）が、いずれにしても、「無益な用心」という副題がついていたことは共通する。

ケチで嫉妬深くて欲張りな医師バルトロは自分が後見人であるロジーナに一方的に恋心を抱き、結婚して財産も自分のものにすることを企んで、箱入り娘のように家の中に閉じ込め、何もかも監視し、男が寄り付かないように用心している。ところが、アルマヴィーヴァ伯爵がロジーナを見初め、愛が真実であることを確かめるために、リンドーロという名前の貧しい学生に変装し、バルトロの家に出入りする理髪師であるフィガロの助けを借りてうまく家の中に入りこむ。ロジーナの音楽教師であり、守銭奴でもあるバジーリオが加わり、兵隊たちが加わって大混乱が起こるが、最後には伯爵はロジーナとの愛を成就させる。すなわち、まさにバルトロの用心は無益に終わるのである。

この「無益な用心」という言葉はオペラの中で数回口にされる。ロジーナがアルマヴィーヴァに秘密の手紙を渡そうとすると、バルトロに見つかりそうになって、それは手紙ではなく、オペラ「無益な用心」のアリアを写したものだと言い訳する。音楽教師バジーリオの弟子と称してアルマヴィーヴァ伯爵がバルトロの家の中に入りこんで、ロジーナに歌の練習をする際に用いられる曲も「無益な用心」のロンドである。

バルトロはロジーナを家に閉じ込め、外に出さないように気を付ける。男を家に入れないように監視する。鍵をかけ、かんぬきをかける。第1幕第2場のバルトロの歌うアリア「私のような医者に向かって」は、部屋に鍵をかけてロジーナを閉じ込め、思いのままにしようともくろんでいることを早口で歌う。つまり、バルトロは鍵を支配し、自分の家と外界との間に障壁を作って自分の家を閉鎖空間にしようとする。最後には、アルマヴィーヴァを家に閉じ込めようとしてはしごを取り去る。そして、むしろそのために若い2人は結婚する機会を得ることになる。まさしく無益な用心。

しかも、前にも書いた通り、バルトロが無益な用心をしているわりには、オペラの中に突然、何人もの人物が登場する。第1幕にはバルトロの家にバジーリオ、兵士に扮した伯爵のほか、おおぜいの兵士たちが入りこむ。第2幕でもバジーリオの弟子に変装した伯爵、フィガロ、バジーリオ、兵士たち、公証人など、バルトロが呼び入れた人や不意の人が次々に現れる。この点においても、「無益な用心」といえなくもない。

3

話を戻そう。ベルタとは何者なのか。

これを考えるためには、『セビーリヤの理髪師』において登場人物が対になり、表裏の関係で成り立っていることを確認しておく必要がある。

いうまでもなく、このオペラはアルマヴィーヴァ伯爵とロジーナの愛の成就をストーリーの根幹としている。したがって、この2人の主人公が対を成している。だが、それ以上に強力な表裏の関係がもう1つある。それは、バルトロの家に入出入りする理髪師フィガロと音楽教師バジーリオである。この2人は似たところのある対照的な2人として描かれる。

まず金に対する執着において共通している。第1幕第2場で、フィガロは伯爵に遠回しに金貨を要求し、それと引き換えにロジーナとの仲を取り持つことを約束する。バジーリオは金銭的利害によってバルトロの味方をしようとしているが、第2幕で伯爵の秘密を守る代償として執拗に金貨を求める。一方はさわやかに明るく金を求め、もう一方は陰湿に執拗に金を求めるにせよ、行為そのものは共通する。

そして、フィガロもバジーリオもともに登場してすぐに高い技巧を要する魅力的な歌を歌う。フィガロは「私は街の何でも屋」、バジーリオは「陰口はそよ風のように」。その点でも共通するが、その歌の内容は表裏の関係を成す。フィガロのほうは陽気な人気者であることを観客に印象付け、バジーリオは陰險な嫌われ者であることを示す。こうして、フィガロは伯爵とロジーナの恋を推進し、バジーリオはそれを阻止する側で行動する。

また、第1幕冒頭に登場して、ロジーナの暮らす窓辺でセレナードを奏でる音楽師たちとそれを指図するアルマヴィーヴァ伯爵の召使フィオレツォは、第1幕と第2幕の終盤にバルトロ家に押し入ってくる兵士たちとその隊長と表裏の関係だろう。ともに合唱団員と1人の歌手から成り、静かであるべき場に押しかけて騒ぎを引き起こすという同じような役割を演じている。

ところが、そう考えると、もう1人の主要人物であるバルトロにだけ、明らかな対になる人物が見当たらないことになる。では、バルトロの表裏をなす人物とは誰なのか。

私見によれば、それこそがベルタなのである。

ベルタは年老いた家政婦と設定されている。のちに見る通り、アリアの中でも自らの老いを嘆く。いうまでもなく、一方のバルトロは年に差があるロジーナとの結婚をもくろんでいる老人である。はっきりした年齢は示されていないが、ベルタとバルトロはほぼ同年代と考えられるだろう。

しかも、名前にも2人に共通点がある。現在、都市名や空港名を省略するときに用いられるように、ベルタ(BERTA)の子音のみを示すとBRTになる。いっぽうのバルトロ(BARTOLO)はBRTL。最後のLを除けば、まったく同じである。少なくとも、2人の名前を耳で聴いたり目で読んだりする人の頭脳の中に、2人は同じような音によって作られた名前だということは印象付けられるはずである。

またベルタがバルトロの対としての存在を与えられたのには、当時すでに有名だったモーツァルトの『フィガロの結婚』の影響があるだろう。このオペラでもバルトロが主要な人物として登場するが、第3幕でフィガロが何とバルトロとその女中であつたマルチェリーナの間にできた子供であつたことが発覚する(3)。もちろん、時間軸から考えて、『セビーリヤの理髪師』のベルタとマルチェリーナは同一人物のはずはないが、モーツァルトのオペラがロッシェニとステルビーニの頭にあつて、ベルタをバルトロの対の人物にしたとも十分に考えられる。

このような理由によって、ベルタが単なる家政婦という脇役でありながらもバルトロとのバランスのためにアリアを与えられているともいえるだろう。

では、ベルタが持つバルトロと対照的な性格とはどのようなものなのか。

ベルタの性格を明確にするためにベルタのセリフを見てみよう。ベルタはバルトロとロジーナのやり取りの後、次のようなセリフを語る。

「ついさっきまでこの部屋でぶつくさいうのが聞こえたようだった。後見人さんだったろう。被後見人の娘さんといっしょでは、気の休まるいっ時だってあるまいさ……。当節の娘たちはものを聴き分けようとはしないもの。」

「なんて疑い深いじじいだろう！ 自分で行くがいいさ。死ぬまでいるがいいさ。この家ではしょっちゅう中わめき声やらどたばた騒ぎ。口喧嘩したり、泣いたり、おどしたり……。気の休まるひまもありゃしない。こんな強欲で不平たらたらのじじいといっしょでは！ ああ、なんて家だろう！ ああ、なんとごたつく家だろう」(4)

ベルタはバルトロの家に雇われていながら、バルトロやロジーナの様子を冷ややかに見ているといえそうだ。主人に従順なわけでもない。閉じ込められたロジーナに同情的なわけでもない。どちらに味方するわけでもなく、客観的に冷ややかに、距離を置いてバルトロの家の様子を見ている。

そもそも、バルトロはアンブロージョとベルタの二人の召使を役立たずとみなしており、しばしば罵る。実際、召使たちはあくびやくしゃみをするばかりで、なかなかバルトロの指示に従わない。これでは、ベルタが主人バルトロの味方をするはずもなかろう。

ところで、先ほども述べた通り、バルトロが鍵を支配し、外界からの人の侵入を阻止しようとしているのに、しばしば人が乱入する。乱入するからには鍵を開けている人物がいるはずである。誰かがドアを開けているからこそ、登場人物がバルトロに家の中に入ってくる。

では、ドアを開けているのはだれか。

言うまでもなく、それは召使の役割であり、しかも、その多くがベルタの役割であるらしい。

第1幕第12場で兵士に変装した伯爵がドアをノックした時、ベルタが「ノックしている」と気づき、「ただ今参ります」と答えて、くしゃみをしながら扉を開く。オペラの台本の中でドアを開く人物が特定されているのは、ベルタ以外にはいない。

また第2幕第5場、バルトロは伯爵やフィガロの闖入に怒って、追い出した後、ベルタに鍵をかけさせようとして語る。「おまえは扉口につたっておれ。……それから……。いや、よい。……安心ができない。わしが自分でそこにいるとしよう」(5)。

ここでも、ベルタは見張りをする人間としては信頼に値しないとバルトロは語っているのである。いいかえれば、ベルタは鍵を開けてしまうかもしれない人間としてバルトロにとらえられているのである。

バルトロが「鍵を閉める人」であるのに対して、ベルタは、「鍵を開く人」としての役割を与えられているといえるだろう。つまりは、「無益な用心」をまさしく「無益」にするのがベルタであって、ベルタは鍵をコントロールする文字通りの「キーパーソン」にほかならない。先ほど述べた通り、舞台上に次々と人物が現れるが、その多くをベルタが舞台上に通していると考えられる。

そう考えると、くしゃみというベルタをしばしば襲う生理現象も、そのような役割とは無関係とはいえない。くしゃみというのは、体内に閉じ込められていたものを外に吐き出す行為で

あって、ベルタの人物像の1つの象徴といえるかもしれない。

ところで、ベルタの社会階層について忘れてはならない。言うまでもなく、ベルタは家政婦であって、庶民階級の人間にはほかならない。アルマヴィーヴァ伯爵やロジーナ（6）のような貴族でもなければ、バルトロのような知識階級のブルジョワでもない。しかも、ベルタの階層を踏まえたうえでアリアを一言でまとめて言えば、「貴族だのブルジョワだのはいい気なものだ。このブルジョワの家はうるさくてかなわない」ということに尽きるだろう。

これは、まさしく観客席にいる庶民のほとんどが感じていることがらでもあっただろう。このロッシーニの『セビーリヤの理髪師』が初演されたころには、フランス革命から30年近くがたっていた。イタリア半島の諸国はナポレオン軍に侵攻され、貴族の権威が失墜し、フランス本国と同じようにブルジョワジーの力が勃興していた。そして、それにともない、まさにオペラが「大衆芸術の誕生」（7）を示した時代であり、栈敷席には貴族が多くを占めていたものの、平土間には庶民が集っていた。とりわけ、『セビーリヤの理髪師』のようなオペラ・ブッフアは、ブルジョワばかりではなく、「教養がなく文学を理解しない新しい聴衆」（8）の娯楽としても成り立ちつつあった。

ところが、『セビーリヤの理髪師』の舞台上で展開されるのは貴族とブルジョワの恋の物語である。原作の続編『フィガロの結婚』で庶民を代表して貴族を出し抜いた下僕フィガロは、ここでは伯爵の手先になって恋の仲立ちをするばかり。『フィガロの結婚』であれほど強烈に主張された庶民精神はフィガロには体现されない。そんな中、庶民の気持ちを代弁するのがベルタだった。

そして、それこそが貴族が権力を持ち、庶民が十分な発言権を持たないフランス革命前の1782年に作曲されたパイジェットの貴族的な雰囲気のある『セビーリヤの理髪師』と、フランス革命後のロッシーニのオペラの大きな違いでもあった。

ベルタはバルトロの家と外の世界をつなげ、その間の鍵の役割を果たすだけではない。貴族的な世界で展開される舞台上と、もう少し低い層の人間が増えつつあった観客席の間をつなげる鍵の役割も果たしているのである。それは言い換えれば、舞台の上で展開されるフランス革命前の18世紀的世界と、1816年から20世紀へと続く民衆の時代の「鍵」をなしていたということでもある。

ベルタの存在があり、バルトロの世界と外の世界が開かれ、同時に、舞台上の世界と観客席がつながりあってこそ、ロッシーニの『セビーリヤの理髪師』は貴族的なオペラではなく、ロッシーニ特有の庶民的でダイナミックで快活でユーモラスなオペラになったといえるのである。

4 結論に代えて

それにしても、ベルタによって第2幕に歌われるアリアは、いかにも庶民の音楽らしく単純でありながら魅力的ではないか。

このアリアの歌詞を確認しよう。

「じじいは女房を探し、娘は亭主をほしがる。あっちはいらいらし、こっちは気が触れる。二人とも縛っちまえばいいのさ。でもさ、みんなを逆上させるこの恋愛ってなんだろうね？ それは誰にでもある病気だよ。じれったさだよ。うずきだよ……。やむにやまれぬ気持ちだよ。悩みだよ……。かわいそうに私まで身につまされる。でも先き行きがどうなるかわかったも

のじゃない。ああ！ いまわしい老いの坂……。おまえは誰からもさげすまれる……。望みの絶えた老婆として死んでいくのが私には似つかわしい。」(9)

歌詞としては嘆き節といえるようなものだが、このアリアを聴く人の誰もが感じる通り、そこに暗さはなく、いかにもロッシーニらしく、むしろ皮肉たっぷりユーモラスで面白おかしい。これは恨み節という形を取った愛へのあこがれの歌にほかならない。バルトロが一方的にロジーナに横恋慕して騒動を起こすのに対して、ベルタは同じように恋に憧れながらも、庶民感覚にあふれた歌を戯れに歌う。

ところで、このアリアは、多くの人に1808年、すなわちロッシーニの『セビーリヤの理髪師』の初演の8年前にベートーヴェンが作曲した「合唱幻想曲」の合唱部分の印象的なメロディを思い起こさせずにはいないのではあるまいか。

譜例1がベルタのアリア、譜例2がベートーヴェンの「合唱幻想曲」である。調性こそ異なるが、ともに4分の2拍子。メロディは8分音符で描かれ、初めは同じ音が続き、次に上下して5小節目の2つ目の8分音符で1つのフレーズが終わり、すぐまたその変形のフレーズが続く。音の上下の仕方に若干の違いがあるが、メロディ線はとても良く似ている。

「合唱幻想曲」は、1824年に初演されたベートーヴェンの交響曲第9番を先取りした曲として知られている。第9でも、この曲と同じようにオーケストラ演奏ののちに合唱が加わり、このメロディとよく似た「喜びの歌」が歌われる。いずれも、ベートーヴェンにしてはあまりに素朴であり、単純なメロディによって、人類愛や生のよろこび、愛の喜びが歌われる。18世紀までの作曲家たちの作ってきた神を称える歌でも国王に捧げる歌でもない。民衆の喜びを高らかに歌う音楽である。

ロッシーニがベートーヴェンのこのメロディに影響を受けたかどうか(10)、ロッシーニがいかなる意図でこのメロディを作曲したのかは明確にできない。しかし、少なくともこのオペラを鑑賞する人々は、ベルタのアリアを聴きながら、ベートーヴェンが民衆の人類愛を高らかに歌いあげるために用いたメロディと無意識のうちに重ね合わせ、そこに民衆の力、そして愛の喜び、生きる喜びを感じ取ったであろうことは間違いあるまい。

譜例1 『セビーリヤ理髪師』 ベルタのアリア



譜例2 ベートーヴェン 「合唱幻想曲」より



注

- (1) 原作はフランス語タイトルである。Le Barbier de Séville ou la Précaution inutile
- (2) 現在知られているだけで 15 人が作曲している。(オペラ名作鑑賞 6『セビリャの理髪師』 監修・永竹由幸)
- (3) ボーマルシェの原作では、モーツァルトのオペラ(台本はロレンツォ・ダ・ポンテの手になる)のマルチェリーナに当たるマルスリーヌは、身持ちの悪い町人の娘ということになっており、「女中」だったとは明記されていない。
- (4) ロッシーニ『セビリャの理髪師』 下位英一訳 NHK 編 オペラ対訳選書 19 より
- (5) ロッシーニ『セビリャの理髪師』 前掲書
- (6) ロッシーニのオペラでは明記されないが、ボーマルシェの原作ではロジューヌは貴族出身とされている。
- (7) マリオ・ニコラーオ『ロッシーニ 仮面の男』(音楽之友社 小畑恒夫 訳)
- (8) マリオ・ニコラーオ『ロッシーニ 仮面の男』 前掲書
- (9) ロッシーニ『セビリャの理髪師』 下位英一訳 前掲書
- (10) 1822 年、ロッシーニはウィーン滞在のおり、尊敬するベートーヴェンを訪れた。そこで「あなたはオペラ・ブッファ以外のものを作ってはいけません。ほかの分野でも成功しようとすれば、あなたの天分を歪める結果になるでしょう」といわれたことが伝えられている。(『ロッシーニ 仮面の男』)

参考文献

- ・ボーマルシェ『フィガロの結婚』(岩波文庫 辰野隆 訳)
- ・ボーマルシェ『セビリャの理髪師』(岩波文庫 鈴木康司 訳)
- ・ロッシーニ オペラ対訳ライブラリー『セビリャの理髪師』(音楽之友社 鈴木鉄男 訳)
- ・ロッシーニ オペラ対訳選書 19『セビリャの理髪師』(日本放送協会 下位英一 訳)
- ・オペラ名作鑑賞 6『セビリャの理髪師』(世界文化社 永竹由幸 監修)
- ・マリオ・ニコラーオ『ロッシーニ 仮面の男』(音楽之友社 小畑恒夫 訳)
- ・スタンダール『ロッシーニ伝』(みすず書房 山辺雅彦 訳)
- ・Caron de Beaumarchais : Le barbier de Séville ou la précaution inutile (French Edition) Kindle 版
- ・Caron de Beaumarchais : La Folle Journée ou le Mariage de Figaro (French Edition) Kindle 版